

---

【自由論題：ネットアセスメント】

## ネットアセスメント再考

航空幕僚監部防衛部  
1等空佐 坂田 靖弘

---

### はじめに

近年、ネットアセスメント (Net Assessment) への関心が再び高まっている。この背景には次の2点があると考えられる。第1に、「ペンタゴンのヨード」と呼ばれ、米国防総省で40年以上にわたってネットアセスメント室 (Office of Net Assessment: ONA) を率いたアンドリュー・マーシャル (Andrew W. Marshall) の退官 (2015年1月) と逝去 (2019年3月) である。前者によって、公職を離れたマーシャルがネットアセスメントについて言及できるようになり、関連する著作等にも影響を与え、後者によって、マーシャルの功績が再び脚光を浴びることとなった。第2に、大国間競争が復活したという国際情勢に対する認識である。米国におけるネットアセスメントは、米国とソ連が大国間競争を繰り広げた冷戦時代に軍事力のみならず、国力のすべての要素と趨勢を評価するために考案された手法である。米国と中国・ロシアとの間で大国間競争が復活したとの認識により、かつて米ソ間の競争において米国を勝利に導いた1つの要因であるネットアセスメントに注目が集まるのは自然な流れであると言えるかも知れない。

本稿の目的は、ネットアセスメントの特徴及び性質等を整理し、その要領の一端を明らかにすることにある。ネットアセスメントの概念を説明する際、『孫子』が度々引き合いに出されている<sup>1</sup>。すなわち、その軍事力評価に用いられる概念は、古くから存在していたものであり、決して目新しいものではないということである。また、米国において、マーシャルが確立していったネットアセスメントも、1950年代以降のソ連の核戦力を始めとする軍事力評価の様々な試みに引き続くものであり、それらは国防総省だけでなく、国家安全保障会議 (NSC) や中央情報局 (CIA) の取り組みとして始まったものもあった<sup>2</sup>。この

## エア・アンド・スペース・パワー研究（第9号）

ような経緯を踏まえつつ、本稿で取り扱うネットアセスメントは、1970年代からマーシャルが取り組み続けたネットアセスメントを対象としている。もちろん、マーシャルやネットアセスメントに対しては、その不完全さに対する批判もあるが<sup>3</sup>、先述のとおり、ネットアセスメントは冷戦期という大国間競争の時代を経て洗練されてきた手法である。このため、国家間に存在する競争関係を評価する際には今日もなお有益な手法であると考えられ、この手法について再検討することは意義がある。

本稿では、まずネットアセスメントの特徴及び性質等について整理する。ここでは、マーシャルを始め、米国で実際にネットアセスメントに従事した専門家や研究者の論考を中心にまとめ、いくつかの要点を指摘する。次に、ネットアセスメントの要領について検討する。ネットアセスメントに従事した研究者等による論考を参照し、そのテンプレートの一例を取り上げて検討する。そして最後に、ネットアセスメント実施上の困難と、その困難への対応について考察する。これらを通じて、そもそもネットアセスメントとは何か、そしてネットアセスメントを実施する際にどのような点に留意する必要があるかといった点に関する理解を深めるための資を得て、国家間の競争関係を分析するための一助としたい。

### 1 ネットアセスメントの特徴及び性質等

本章では、ネットアセスメントとは何かという点について整理する<sup>4</sup>。軍事・安全保障の世界に身を置く実務者やその分野の研究者の多くは、「ネットアセスメント」という用語に接したことがあるだろうが、それらの実務者や研究者であっても、「ネットアセスメントとは何か？」という問いに答えることは容易ではなく、漠然とその輪郭を認識しているに過ぎないという場合が多いのではないだろうか。ネットアセスメントは、冷戦期における米国の安全保障に関する実務と密接な関係を持って発展してきた手法である。そのため、アセスメントの手法やアセスメントの結果は、依然としてその多くが機密扱いされており、ネットアセスメントについて知ろうとする場合、ネットアセスメントに携わった実務者や研究者による論考等に頼るほかない。以上のことから、ここでは、マーシャルを始め、ネットアセスメントに携わったエリオット・コーエン (Eliot Cohen)、ポール・ブラッケン (Paul Bracken)、ステファン・ピーター・ローゼン (Stephen Peter Rosen)、ジェイムズ・ロシエ (James G. Roche)、トーマス・マンケン (Thomas G. Mahnken) 及びトーマス・スキュペク (Thomas

M. Skypek) の論考を紐解き、ネットアセスメントの特徴及び性質等について整理する<sup>5</sup>。

### （１）マーシャルの示唆

ネットアセスメントの発展に大きな足跡を残したマーシャルは、ネットアセスメントの考え方について、「米国の兵器システム、戦力、政策を他の国のそれらと注意深く比較すること」であるとしている<sup>6</sup>。その上で、ネットアセスメントの特徴や性質、その考え方に関していくつかの重要な示唆を与えている。

まず、「ネットアセスメントを行うための方法論は実質的にはまったく存在しない」ということである<sup>7</sup>。これは取り組みに伴って方法論も発展させる必要があるとの文脈で述べられたものであるが、マーシャル自身もネットアセスメントを確立していく中で、様々な方法論に学んでいる。それは、ランド研究所の同僚研究者に影響を受けたものだけでなく<sup>8</sup>、組織行動への関心を深めると、カーネギーメロン大学のハーバート・サイモン（Herbert A. Simon）やジェームズ・マーチ（James G. March）を訪ねて議論し、企業によるマーケットシェア拡大の戦略に関心を持つと、ハーバード・ビジネススクールでジョセフ・パウワー（Joseph L. Bower）やローランド・クリステンセン（C. Roland Christensen）が開講している講座からヒントを得るなどしている<sup>9</sup>。これは、自ら問題解決のための方法論を確立していくということであり、マーシャルが、優れたネットアセスメントの作成を「博士論文の作成に匹敵」するものだと考えていたことに通じる<sup>10</sup>。すなわち、型どおりのアプローチに基づいて考察を進めていくと言うよりも、説得力のある分析枠組を構築した上で研究対象に関する考察を進め、既存の知識体系に新しい独自の知見を提供していくことを意味する<sup>11</sup>。しかも、一度確立した方法論であっても、普遍的なものにはなり得ないという点にも注意が必要である。

次に、ネットアセスメントは、処方ではなく診断を目的としている点である。マーシャルは、ネットアセスメントの成果物を「戦力レベルや戦力構造に関する提言を行うためのものではない」と考えており<sup>12</sup>、これは、ONAが国防総省内に独立的に設置され、国防長官に対してアセスメントの結果を提示するという任務を負っていることによる。国防長官は実際の戦闘や作戦にはほとんど影響力を及ぼすことができず、むしろ、「国防長官が決定、あるいは影響力を及ぼすことの大半は未来の戦力」というのがマーシャルの基本的な考えであり<sup>13</sup>、ネットアセスメントにあたっては、国防長官が戦略的な「処方」を行うための「診断」を提供することを重視していた。また、マーシャルは、「我々がここに

## エア・アンド・スペース・パワー研究（第9号）

いるのは、知らせるためであり、喜ばせるためではない」とも語っていたとされ<sup>14</sup>、米国が手にしている、あるいは開拓し得る機会や優位又は損失について、国防総省の高級幹部に早期に知らせたり、警告を与えたりすることに焦点を当てていた<sup>15</sup>。

そして最後に、ネットアセスメントは包括的でなくてはならないと強調している点である<sup>16</sup>。これは、1960年代以降国防総省の意思決定の中心にあったシステム分析への批判的な見解に基づくものであった。マーシャルは、システム分析が兵器システム等を単純化して評価する点に問題があると認識しており、米国と他国との軍事力を総合的に評価する必要があると考えていた。

以上3点が、マーシャルが残したネットアセスメントに関する主要な示唆であるが、これを単に総合しても、「処方重視した包括的な自ら開発した評価手法」としか表現できず、抽象的で捉えにくい印象を与える。

### （2）ネットアセスメントの定義

マーシャルのネットアセスメントに関する考え方は、前項で見たとおりであるが、ネットアセスメントに従事した研究者たちがいくつかの定義を提示している。

コーエンは、ネットアセスメントを「軍事バランスを分析するための技術（craft）であり学問上の流派（discipline）」と定義するとともに、科学（science）とは全く異なるものであることを強調している<sup>17</sup>。ブラッケンも、科学（science）や人文科学（art）とは異なる「熟達したわざ（practice）」であるとし、いくつかの技能（skill）によって構成されると述べている<sup>18</sup>。また、ローゼンは、「平時と戦時の国家安全保障機関による相互作用の分析」として定義している<sup>19</sup>。一方、ロシェとマンケンは、ネットアセスメントには単一の定義はなく、それは、複合的な分析によって構成される「軍事バランスと戦略的競争関係を評価するための枠組」としてしている<sup>20</sup>。さらに、スキュベクとブラッドリー・セイヤー（Bradley A. Thayer）は、「米国と競争相手の能力を評価し、比較優位性が存在する分野を特定する戦略分析のフレームワーク」と述べている<sup>21</sup>。

以上、いくつかのネットアセスメントに関する定義を見たが、マーシャルが1970年代から取り組み始めたネットアセスメントは、半世紀を経てもなおコンセンサスを得られる定義を欠いている。定義を欠いていると言うよりも、むしろ明確な定義によって説明することが難しいと言った方が適切かも知れない。アンドリュー・クレピネヴィッチ（Andrew Krepinevich）は、ネットアセスメントを理解することはとても難しく、簡単に定義するならば「マーシャル

が行っていること」になると述べている<sup>22</sup>。ブラッケンは、ネットアセスメントが「～ではない。」や「～とはこの点で異なる。」等のようにネガティブに定義されることが多いと指摘しており<sup>23</sup>、これは、ネットアセスメントを一般化することの難しさを表していると考えられる。このように、コンセンサスのある明確な定義を欠き、ネガティブに定義されがちであったという点は、ネットアセスメントの多義性や捉えにくさを表していると言えよう。

### （3）ネットアセスメントの特徴

前項で見たように、ネットアセスメントは定義が難しく、捉えにくいという特徴を有している。本節では、その特徴の一端を明らかにし、全体像を把握するため、専門家や研究者が挙げる特徴について整理する。ネットアセスメントの特徴を説明する際に、既存の評価枠組や分析枠組との相違点を挙げている専門家や研究者もいるが、ネットアセスメントの特徴を際立たせるための説明であるため、そのまま取り上げる。

#### ア コーエンの説明：状況評価及びシステム分析との相違点

コーエンは、米軍人が学ぶ「状況評価（estimate of the situation）」との違い、そして「システム分析（system analysis）」との違いから説明している。まず、状況評価との違いについて3点を挙げている<sup>24</sup>。第1に、状況評価は型どおりになりがちであること。第2に、状況評価は個別具体的な作戦や戦闘に焦点を当てがちであること。そして第3に、状況評価は、現時点・現在地に立脚していることである。裏を返せば、フォーマットに柔軟性があり、明確に定義された開始や終了のない包括的かつ全体的な競争に焦点を当て、過去と将来を含む長期間を取り扱うのがネットアセスメントということになる<sup>25</sup>。

システム分析は、ケネディ政権のロバート・マクナマラ（Robert McNamara）国防長官が広く採用した分析手法として有名であるが、コーエンは、システム分析の特徴を4点挙げ、ネットアセスメントとの違いを説明している。第1に、システム分析を用いる研究者は、単一のアプローチや手法を用いがちであり、併せて仮定に重きを置いていること。第2に、システム分析では定量的な分析を重視すること。第3に、システム分析では分析対象を単純化する傾向があること。そして第4に、軍事バランスを分析する際、システム分析では「どの程度で十分か？」といった特定の状況に関する問いを中心にする点である。これに対してネットアセスメントは、多角的かつ事実指向であることを徹底し、無形なものの重要性を認識した手法であるとする。さらに、ネットアセスメントでは、分析対象の単純化に潜む恣意性に否定的な態度であり、「どの程度で十分

## エア・アンド・スペース・パワー研究（第9号）

か？」という問いよりは「現在の競争の性質とは？」といった問いを重視するとしている<sup>26</sup>。これは、分析対象や関連する課題に対して、直接的な解を与えようとするものではなく、より根本的な問題を追求していこうとするアプローチであることを表していると考えられる。

### イ ブラッケンの説明：ネットアセスメント実施上のポイント

ブラッケンは、ネットアセスメントを実施する上でのポイントとして、①戦略的相互作用、②長期的な時間軸、③想像力を持った思考、④官僚的行動の重要性、⑤戦略的非対称性<sup>27</sup>、⑥戦略の多面的性質、という6つを提示している<sup>28</sup>。これらは、次のように要約することができる。すなわち、戦略的相互作用とは、Blue（友軍）とRed（対抗軍）の戦略や行動を（掛け合わせながら）1か所で評価することであり、これを意図的に長期的時間軸で実施して正味の評価を下すものがネットアセスメントである。この時、先入観を排除し、前提や既成事実さえも疑う想像性が求められる。また、ネットアセスメントでは、意思決定過程における官僚主義の影響を重視し、ミラーイメージングの排除を徹底する。そしてブラッケンは、ネットアセスメントは戦略立案を意味せず、戦略そのものの考察であるという特徴を強調している<sup>29</sup>。

### ウ ロシェとマンケンの説明：7つの特徴

ロシェとマンケンは、ネットアセスメントが重視する分野を含め、その特徴等を7点挙げている。それらは、①安全保障機関の競争的相互作用、②官僚主義的・組織的・文化的要素、③限定的な資源と不確実な情報、④非対称性、⑤長期的視野（20～30年）、⑥多くの学術領域にわたる分析、⑦指示的ではなく現状記述的、という7点である<sup>30</sup>。前項と同様にこれらを要約して考えると、競争者間の関係は閉鎖的ではなく相互に作用し合っているが、それぞれの競争者は、各々の官僚主義や組織・文化的要素の影響を受けるとともに、限定的な資源と情報に基づいて判断や意思決定を行うため、同じ状況に置かれても異なる行動等になり、その違いや違いが持つ意味について考察するのがネットアセスメントである。また、長期的な視野に立ち、単一の分析枠組によらず幅広い学術分野から検証し、事実を提示するものとしてネットアセスメントの性質を説明しているが、これはコーエンやブラッケンの説明とほぼ同じである。

### エ スキューペクの指摘：2つの相違点

スキューペクは、ネットアセスメントは将来を探求するために長期的な傾向を分析することに重きを置くという認識において他の研究者等と認識を一にしている。また、同じく、ネットアセスメントが経済学、軍事史、政治学及び組

織行動学の要素を取り入れるとともに、様々な量的・質的な方法論を採用する手法であることも主張している。その上で、ネットアセスメントと軍事力分析に用いられる他のモデルとの2つの違いを強調している。1つは、ネットアセスメントは比較優位を有する分野を特定するために、自らと競争相手の両方を一度に分析する点であり、もう1つは、ネットアセスメントは政策における対応策よりも問題の診断に焦点を当てる点である<sup>31</sup>。

これらを踏まえて、スキュペクは、ネットアセスメントの基本的なアウトプットについて、外部にある機会と脅威とともに自らの強みと弱みに焦点を当てるSWOT分析のアウトプットとの類似性を指摘しており、この点は注目に値する<sup>32</sup>。そして、SWOT分析では、外部環境と内部環境をプラス要因とマイナス要因から分析して4象限で表現するのに対し、ネットアセスメントでは、相手と自らの能力や相手を理解する方法とプロセスを総合的に評価する点を相違点として挙げている<sup>33</sup>。

### （４）ネットアセスメントとは何か

以上、ネットアセスメントの定義や特徴について、ネットアセスメントの実務に携わった経験を持つ研究者等による説明を取り上げた。これらを総合すると、次の5点が浮かび上がる。

第1に、ネットアセスメントは、マーシャルの示唆にもあったように、全体的・包括的な評価である。コーエンが指摘しているように、単一の戦闘局面に注目する「状況評価」のようなものとは異なり、単一の戦闘の背景まで評価の対象にするという意味であり、ネットアセスメントが国家レベルの戦略的競争のみを評価対象としていることを意味しない。例えば、グローバルな米ソ間の軍事バランスという国家レベルの評価を行う場合も、機能（核や空軍力等）や地理（欧州やアジア等）に焦点を当てた付随的なバランスの評価を積み上げることになる<sup>34</sup>。また、ネットアセスメントは、特定のフォーマットを持たない。様々な分析枠組を用いるものの、特定の分析枠組に重きを置くこともない。これは言い換えるならば、多角的に事象を分析するということであり、ブラッケンが指摘している「先入観を排除し、前提や既成事実さえも疑う想像性」にも繋がるものである。

第2に、長期的展望のための評価だという点である。マーシャルの語ったところによると、ネットアセスメントは、「戦域司令官や彼らの目の前の問題のため」に実施するものではない<sup>35</sup>。また、ブラッケンが述べているように、戦略を考える際には、政策決定の主要なサイクルである日目の単位や政権交代という

## エア・アンド・スペース・パワー研究（第9号）

2つの時間軸では不十分であり<sup>36</sup>、長期的展望のために比較的長期間を分析対象とするのは、ネットアセスメントの大きな特徴である。

第3に、形而上の要素、すなわちドクトリンや文化等を重視する点である。また、意思決定における官僚制度・官僚主義の影響についても同様に重視しており、これは、コーエン、ブラッケン、そしてロシエとマンケンのが指摘していることである。文化的要素や官僚主義等の組織的影響を重視するという事は、言い換えるならば、アセスメントの対象として、意思決定や行動における非合理的な側面により注目しているということである。

第4に、相手だけでなく、自らに対する評価も同時に行うということである。ネットアセスメントでは、競争相手だけではなく、自らの形而上の要素についても考察し評価することになる。また、評価する際には、専門家たちの言葉を借りるならば「相互作用」に基づく展望と比較優位という点に留意することが必要であり、ブラッケンやスキュベクが指摘するように、相手と自らを同じテーブルで評価することが重要になる。

そして第5に、4点目でも述べた自らと競争相手を同じテーブルで評価することを通じ、比較優位（あるいは劣位）について明らかにしていくという点である。自らと競争相手を一か所に置き、様々な観点から診断結果を示すためには、相対関係における自らの強みと弱みを明らかにしていく必要がある。

## 2 実務におけるネットアセスメント

ネットアセスメントの特徴について明らかにしたところで、次に、ネットアセスメントを実施する際の要領や留意点について考察する。まず、ネットアセスメントにおいて、結論（診断結果）を導き出すための要領について整理する。前章で述べたように、ネットアセスメントは特定のフォーマットを持たない。しかしながら、専門家が提示しているいくつかのテンプレート（ひな型）を手掛りとして考察してみたい。次に、ネットアセスメントの実施を支えるものについてまとめる。ここで対象とするのは、ネットアセスメントを構成する多くの学術的な理論や分析手法ではなく、実務上の留意点である。

### （1）ネットアセスメントのテンプレート

#### ア コーエンのテンプレート

コーエンは、ネットアセスメントのテンプレート（ひな型）として、①バランスの捉え方、②傾向、③作戦構想、④非対称性、⑤シナリオの5つを挙げている。コーエンが提示したテンプレートは、この構成でネットアセスメントを

実施できる（レポートを作成できる）というのではなく、むしろネットアセスメントを実施する上で共通かつ必須の要素を提示した、言わば思考過程のテンプレートと言った性格のものである。

第1のバランスについて、コーエンはこの「バランス」をどのように捉えるかという点が最も重要であり、同時に最も困難であると述べている<sup>37</sup>。これは、ネットアセスメントにおける「問い」を表すものであり、何を明らかにしようとしているのかを明確に認識することにつながる。そして、検討すべき主題の背景にはどのようなポリティクスがあるのか、それぞれの側はどのような目標を達成しようとしているかという副次的な課題に答えることになる。コーエンが主張するバランスは、ここでは「バランス＝収支」と考えるとイメージしやすいかも知れない。自らと相手とのいかなる分野や状況等の収支を明らかにしようとしているのかを明確にすべきということである。

バランスに関して、コーエンは特定の手法に基づいた導出に否定的であり、いくつもの手法を並行的に用いながら全体像を明らかにしていくことを提示している<sup>38</sup>。ブラッケンも、ネットアセスメントでは特定の手法、特に数学的モデルをほとんど使用することがないとし、それら数学的モデルは変数間に存在する強い不確実性を考慮しておらず、モデルの設定を容易にするような仮定を好む傾向があると批判している<sup>39</sup>。また、ロシェとマンケンは、そのようにして明らかにしたバランスも数年ごとに変化するものであり、循環的に評価を行っていくことが必要だと主張している<sup>40</sup>。

コーエンが提示するテンプレートの2つ目は、傾向である。これは、20年以上もの長期間にわたる行動の傾向を研究し、5～10年先を見通そうというものである<sup>41</sup>。長期的展望の精度を高めるためには、現在の状況をより確実に知る必要があり、現在の状況が将来にわたってどのように推移していくかを考察しなければならない。そのために必要となるのが、現在に至る過去を知ることであり、その過程の中から傾向を導出することである。さらに、長期的傾向を知るためには、ロシェとマンケンが指摘しているように、物事の推移のペースやその強弱について把握するように努める必要がある<sup>42</sup>。

テンプレートの3つ目は、作戦構想である。コーエンは、作戦構想として考えるべきは相手の戦い方を理解することであり、軍事力のカウントではないとしている。具体的には、相手の戦争哲学（philosophy of war）の理解や意思決定に関する文化の理解等である<sup>43</sup>。ここでコーエンは、定量分析よりも定性分析の重要性を主張しているが、ネットアセスメントでは幅広い学術分野や分析

## エア・アンド・スペース・パワー研究（第9号）

枠組を用いるということは、先述のとおり他の研究者等も指摘している。また、コーエンは、作戦構想を動的なものとして捉えるべきだとし、相手自身の組織やルーティン、政策的嗜好等の相互作用によって変化するという点にも言及している<sup>44</sup>。

コーエンが提示する4つ目は、非対称性である。非対称性とは、自らと相手とを同一視しないということであり、コーエンは、非対称性のいくらかはかなり明白であると説明している<sup>45</sup>。非対称性について検討する際、コーエンは、この非対称性がどのように生じてくるのかに注目すべきであることを強調し、機構上の違い、政治目的の違い、作戦目標の違いといった着目すべき点を例示している。また、非対称性について検討する際のもう1つの重要な事項として、非対称性が時間と共に変化するという点も強調している。

最後のシナリオは、ネットアセスメントを通じて、考慮が必要な様々なシナリオを導出することを意味している<sup>46</sup>。導出したシナリオは、政策立案者らに提示され、起こり得る事態等に対する理解を促すことになる。

### イ スキュペクによるアウトライン

スキュペクは、ネットアセスメントを実施する上で、傾向、ドクトリン及び非対称性（比較優位）<sup>47</sup>、シナリオという4つの柱を示しているが、これらは先に取り上げたコーエンによるテンプレートとほぼ同一である<sup>48</sup>。スキュペクは、この4つの柱の前提として、自らと競争相手との間の評価対象とするバランスをどのように考えるかが重要であり、それは調査する競争の性質と実施する評価の種類（地域又は機能等）によるとしている<sup>49</sup>。その一方で、スキュペクは、図1のようなネットアセスメントの一例を提示している。

スキュペクは、先に示した4つの柱は図1の例のように反映されるが、その順序はネットアセスメント実施者によって変わるものとしている<sup>50</sup>。スキュペクは、図1で示したアセスメントの一例におけるそれぞれの項目の細部内容や評価の要領については言及していないが、ある2国間の海洋における競争に関するネットアセスメントを例として取り上げ、長期的な海軍力整備の傾向とドクトリンが評価対象となり、整備補給能力、展開能力、そして作戦遂行能力等の様々な付随する要素についても検証することになる旨述べている<sup>51</sup>。

1. 競争を分析する上での政治・軍事上の背景
  - 1.1 バランスの傾向
  - 1.2 ドクトリンの非対称性
  - 1.3 認知上の分析
  - 1.4 シナリオ
2. バランスの評価
  - 2.1 戦略的非対称性
  - 2.2 環境上の機会
  - 2.3 第三国又は同盟システムによるインパクト
  - 2.4 追加調査を要する課題

図1 スキューベクによる一例

Assessment: History and Application,” p.9 を基に作成。

## ウ ワッツによる事例紹介

バリー・ワッツ（Barry D. Watts）は、冷戦期のネットアセスメントのうち機密解除となっている 1978 年の「欧州における軍事バランス」について、その構成を図 2 のように紹介している<sup>52</sup>。

1. はじめに
2. 基本的な評価
3. バランスの状況
  - どのように戦争が始まるか（戦争の開始要件）
  - 技術的近代化 ➢ 戦略バランスの影響
  - 戦域における核戦力 ➢ 通常戦力
  - 航空戦力の役割と防空戦力 ➢ C3（指揮、統制及び通信）
  - C3 への対抗 ➢ 戦力配備
  - 持続力 ➢ 化学作戦
  - NATO ➢ 主要な不確実要素
4. 重要な課題
  - 戦争の開始要件の考察
  - ソ連が重視する電子戦への対応
  - 抑止への重点的取り組み

図2 欧州における軍事バランス（1978年）

ワッツは、ネットアセスメントの要領について解説するためではなく、NATO とワルシャワ条約機構とのバランスに関する 1970 年代のネットアセスメント

## エア・アンド・スペース・パワー研究（第9号）

が国防長官らにどのような影響を与えたかを説明するために図2を提示している。そのため、スキュペクの例と同様に、細部の評価要領や結果等についてはうかがい知ることができない。

なお、ワッツは、このアセスメントによって当時のハロルド・ブラウン（Harold Brown）国防長官に3つの注意喚起を行ったとしている。第1に、欧州における戦争開始要件の指摘は、NATO 同盟国間における認識共有のためのより充実したシナリオ作成の必要性の提起である。第2に、ソ連の電子戦ドクトリンでは、指揮、統制及び通信（C3）について NATO よりも重視しているということ、そして第3に、欧州における戦争の抑止は、NATO とワルシャワ条約機構との間の相互関係に関するソ連側の認識にかかっているが、欧州における戦力バランスをソ連側がどのように認識しているかという点についての米側における理解は限定的であるということである<sup>53</sup>。

### （2）ネットアセスメントを支えるもの

これまで説明してきたように、ネットアセスメントは多くの学問領域にわたる分析を要し、様々な分析手法や枠組を用いるものである。そのため、ここでは学術的な分析手法や枠組の1つ1つを取り上げることはせず、ネットアセスメントの実施を支える要素のうち、軍事史家と語学専門家の貢献や役割について説明する。

#### ア 軍事史家の貢献

まず軍事史家が果たす役割である。ネットアセスメントは、長期的な展望を行うために、ある国の意思決定や行動等の傾向を分析の対象としている。そして、傾向を知るためには、その過去にさかのぼって過去から現在に至る経緯を見ていく必要がある。この点に関し、ウィリアムソン・マーレイ（Williamson Murray）は、歴史に基づいて現在を深く理解することが、将来を考えるための第1歩であると強調している<sup>54</sup>。

一方でマーレイは、歴史の使用に関して2つの点を指摘している。第1に、多くの政治学者が歴史を表層的にしか取り扱わないことである。マーレイは、マーシャルが安全保障上の課題を理解するために軍事史を適用するようになったことを評価しているが、同時に、典型的な政治学者は歴史を表面的にしか用いず、結果として、将来に関する重要な示唆を得られていないと批判している<sup>55</sup>。そして第2に、歴史が恣意的に使用されるということである<sup>56</sup>。マーレイは、特に政治学者等による二次的な歴史の使用が歪曲や誤った解釈に満ちているということを指摘しており<sup>57</sup>、こういった課題を解決するのが軍事史家の役

割であると考えている。

加えて、マーレイは、軍事史家の側から戦略家や政策立案者に対して、自らの研究によって得られたインプリケーションに関する議論を働きかけることもなかったという点も指摘している。しかしながら、ネットアセスメントに歴史の観点を組み込むことが必要だと考えるマーシャルは、マーレイやアーネスト・メイ（Ernest R. May）等の歴史家を自らの研究に参加させるなどして関係を構築し、ネットアセスメントに歴史の観点を呼び込んだ。

マーレイは、歴史を理解するためには、生涯をかけて過去に学ぶ必要があるとしているが<sup>58</sup>、軍事史の専門家ではない実務者や研究者にとって、これは難しいものであり、いかに軍事史家を分析や評価のプロセスに関与させるかが重要となる。

## イ 語学専門家の役割

ネットアセスメントの実践について記した論文等において、相手を知ることの重要性について言及したものは多いが、そのために不可欠な言語の課題に言及しているものは少ない。これは、自明であるがゆえという理由もあるだろうが、ジョン・バティレガ（John A. Battilega）は、自らの経験から得られた教訓として、語学を修得した分析官の必要性を強調している<sup>59</sup>。

バティレガは、マーシャルが 1970 年代半ばに行っていたネットアセスメントでは欠けていた「ソ連側の考え方」というピースについて大きく貢献した研究者である<sup>60</sup>。バティレガによるソ連のアセスメントによって、ソ連側から見たソ連の強さや脆弱性を評価できるようになった。ソ連側からの見方に注目したのはバティレガだけではなく<sup>61</sup>、バティレガとそのチームはソ連側の公刊資料を熟読するとともに、ソ連からの亡命者や離反者からソ連の内情等を聴取して資料を蓄積していった<sup>62</sup>。このような、相手側の資料を徹底的に分析する上では当然相手側の言語に精通することが必須であり、バティレガの指摘には留意する必要があるだろう。

## 3 ネットアセスメント実施上の困難と対応

これまで、ネットアセスメントの特徴等を明らかにし、その実践がどのようなものであるかを整理してきたが、ネットアセスメントの実施にあたっては困難にも直面する。次にそれら困難のいくつかを概観するとともに、対応策について検討する。

## （1）リーダーシップとの関係

まず、リーダーシップとの関係である。いかに優れたアセスメントを作成しても、それが全てのリーダーに受け入れられるわけではないし、米国においてもネットアセスメント又は ONA の活用方法も様々である。これは、マーシャルと、彼が率いた ONA のたどった経緯に表れている。

マーシャルは、ニクソン大統領期の 1973 年に国防総省に設置された ONA の室長に就任し<sup>63</sup>、2015 年 1 月にその職を辞すまでの間、延べ 13 名の国防長官に仕えた。マンケン は、この間の国防長官の ONA に対する姿勢をいくつかに分類している<sup>64</sup>。まず、ネットアセスメントそのものに価値を見出したグループであり、これにはジェームズ・シュレジンジャー（James R. Schlesinger）、ドナルド・ラムズフェルド（Donald Rumsfeld）、ブラウンらがあたる。次に、様々なアイデアの提供者として評価しているグループであり、レーガン政権において競争戦略（Competitive Strategy）を主導したキャスパー・ワインバーガー（Caspar Weinberger）やフランク・カールッチ（Frank Carlucci）がこれにあたる<sup>65</sup>。最後に、知的ネットワークの中心として活用したグループで、ディック・チェイニー（Dick Cheney）を例として挙げている<sup>66</sup>。このほか、ONA に価値を見出さなかった国防長官もおり、クリントン政権のウィリアム・コーエン（William Cohen）をその典型として挙げている。また、報告を受ける方法にも国防長官それぞれの好みがあり、シュレジンジャーやラムズフェルドは議論を望んでマーシャルを個人的なアドバイザーのように扱ったが、ブラウンはむしろ報告書を読むことを好んでいた<sup>67</sup>

これらのことから、次の 2 つの示唆を得ることができる。まず、ネットアセスメント及びアセスメントを実施する組織（ONA）の位置付けに関する示唆である。ONA や室長の位置付けは国防総省指令等によって明示されているが<sup>68</sup>、先に見たように、その活用はその時々の国防長官次第である。言い換えるならば、政策決定過程にどのような影響を及ぼすかは、そのアセスメントの質よりも、国防長官との関係等に左右されることもあったのである。ネットアセスメントを政策立案の過程に取り入れる場合、そのアセスメントをどのように位置付けるかは議論の余地がある。

第 2 に、第 1 の点とも関係するが、ネットアセスメントが国防長官の好みを意識したアウトプットにならないように、細心の注意が必要だということである。国防長官に直接意見を提示できるという ONA の特別な性格は、ともすれば国防長官が好んだり、欲していたりするアウトプットを提示することも可能

である。しかし、マーシャルは、「目にした事実をそのまま伝える」ことに焦点を当て、政治的打算のために自身の主義主張を妥協させることを嫌っていたとされる<sup>69</sup>。このようなマーシャルの地味で控え目、権力を拡張しようとしな性格は、ネットアセスメントの進展に良い影響を与えたと言えるだろう。

## （２）アセスメントの質の確保

先に、ネットアセスメントや ONA がどのように活用されるかは、その質よりも ONA や室長と国防長官との関係に左右される場合があることを指摘した。仮にそういう場合があったとしても、ネットアセスメントの実施者たちが、その存在意義を自ら証明していくためには、アセスメントの質を維持・向上していくことが必要であり、いかにして評価を得ていくかという点は直面する課題でもあった。

ネットアセスメントの質について評価を得るためには、説得力のあるアセスメントを提示することが必要である。この点、そもそもネットアセスメントは長期的展望のために作成されるものであるから、短期的にアセスメントの正否を評価することは難しい。そのため、アセスメントが正しいかどうかよりも、アセスメントが確からしいと国防長官らに認識させることが重要となる場合もある。この点に関し、アセスメントの実施者は誰かという点が重みを持つことがあり、権威あるリーダーの存在が有益となる。例えばマーシャルは、その前半生のランド研究所における組織行動に関する研究等で名を知られた存在であり、シュレジンジャー国防長官とは極めて親しい間柄であるなど、ネットアセスメント室長着任当初から国防総省の高官たちが一目置く存在であったことは間違いない。マーシャルが好むと好まざるとにかかわらず、そういったマーシャルの存在は、ONA が作成するアセスメントに権威を与えたであろう。

マーシャルのネットアセスメントではグループによるアセスメントを重視していたが<sup>70</sup>、専属のスタッフは少数精鋭であった。ONA の規模は、多い時は 20 名程度、通常はこれをかなり下回る程度のスタッフで構成されていたとされる<sup>71</sup>。ネットアセスメントの質を保つために、マーシャルは闇雲にスタッフを増やすのではなく、適材を適時に登用する方法を選んだということであろう。ただし、ネットアセスメントは様々な分析手法を用いるものであるから、少数の専門家ではそれらを網羅することは難しく、この点に関し、コーエンは、分析のいくらかは外部の専門家等によるべきだとの認識を示している<sup>72</sup>。

この少数のスタッフであるということは、アセスメントを量的に増やすことには不向きであるが<sup>73</sup>、マーシャルがアセスメントを管理する点では有意義で

## エア・アンド・スペース・パワー研究（第9号）

あったと考えられる。マーシャルは、ネットアセスメントの実施にあたって、適切な問いを立てること、優れた問いかけを行うことを重視しており、拙速に答えを導き出そうとする姿勢には否定的であった<sup>74</sup>。マーシャルのこの一貫した姿勢は、彼の下でネットアセスメントに取り組む少数の室員には徹底しやすく、アセスメントの質を保つことにプラスに働いたと考えられる。

### （3）連続性の確保

ネットアセスメントには、過去から現在にいたる事象等に関する蓄積が必要であり、特に長期的な競争関係を分析対象とする場合、アセスメントを数年単位で繰り返し実施し、内容を更新していくものである<sup>75</sup>。このように、ネットアセスメントには一定の連続性が求められるが、組織を単に存続させ続けても連続性は確保できない。

コーエンは、連続性を保つために、2～3年ごとに異動する米軍人ではなく比較的長期間同一部署で勤務可能な文民を室長に据えるべきであると主張している<sup>76</sup>。実に40年以上の間室長を務めたマーシャルは稀有な例であるとしても、コーエンが指摘するように、ネットアセスメント実施組織の長又は鍵となる要員を長期間配置することは連続性の確保に資するであろう。

連続性確保のために、ネットアセスメントに関与する人材の取り入れ方にも工夫が必要である。ONAで実際にアセスメントに携わった研究者は、その後大学で教鞭をとったり、シンクタンクにおける軍事や安全保障の専門家になったりし、それら研究者や専門家はネットアセスメントの概要を学生等に伝えるとともに、優秀な人材をONAを始めとする関係政府機関に紹介するような機能も果たした<sup>77</sup>。マーシャルが意図したか否かは明らかではないが、このようなシステムは、ネットアセスメントに有用な人材を循環的に取り入れていくことに資し、連続性を支える1つの方策となったと考えられる。

また、マーシャルは、ネットアセスメントにかかわる研究事項を部外の研究者や専門家に委託したり、研究への支援を得たりした。さらに、個別の小論文コンテストを主催するなどして優秀な人材の発掘にも努めた<sup>78</sup>。こういった取り組みは、ネットアセスメントに断片的であっても触れる研究者等を増やし、その外縁を広げて有為な人材や研究手法・知見等を取り込みやすくする効果があったと考えられる。

### （4）情報の入手

ネットアセスメントが用いる様々な分析手法や枠組には当然ながら数理モデルも含まれており、モデルに使用するデータの多くは情報組織からの支援を

得ることになる。すなわち、ネットアセスメントを行う上では情報組織との関係が必要不可欠になるが、ここにいくつかの課題が生じる。

第1に、一般に情報機関から秘匿度の高い情報を入手することは容易ではなく、また、入手できたとしても不正確であったり、最新の情報ではなかったりするという点も指摘されている<sup>79</sup>。この点に関連して、コーエンは、情報組織が提供する資料の中には収集方法や期間が一定していないものもあり、きめ細かい情報を要するネットアセスメントに供さないものがある点を指摘している<sup>80</sup>。第2に、第1の点とも関連して、きめ細かい情報を求めるネットアセスメント側の姿勢は、情報組織や同組織が提供する資料への容赦のない懐疑的な態度となって表れることがある。さらに、情報組織の側からすると、ネットアセスメント実施者からの情報要求は他の多くの情報要求と比して回答することが困難なものである<sup>81</sup>。

このような課題は、ネットアセスメント側と情報組織との間に軋轢を生じさせるものであり、好ましくない影響をもたらす場合がある。アダム・シュルスキー（Adam N. Shulsky）は、高度な専門性を有する情報分析官を多く育成することにより、ネットアセスメント側の要求にこたえていく必要性に言及しているが<sup>82</sup>、双方を知る人材の育成や人事交流等も含め、一考に値するものと考ええる。

## おわりに

以上、本稿では、ネットアセスメントについて、これまでその実務に携わった研究者等の論考を中心に整理し、その特徴や性質を明らかにするとともに、実務上の要領や困難さを検討した。

ネットアセスメントは、単一の定義をもって表現することが難しいものであるが、それぞれの研究者等の論考を検討すると、包括的、形而上的要素の重視、相互作用及び比較優位等のキーワードが浮かび上がってくる。また、忘れてはならないのが定まった方法論がなく、それぞれの実施者が方法論の確立に努め、さらに、方法論を逐次更新していく必要があるということである。「博士論文の作成に匹敵」というマーシャルの指摘はこのあたりを的確に表現している。

ネットアセスメント、又はネットアセスメントの考え方を安全保障の実務に取り入れていく際にも、この点への留意が求められる。すなわち、グループでアセスメントを実施するとしても、その中には高度な知的トレーニングを受けた実施者が必須であり、可能な限りグループを牽引するリーダーは、知的活動

## エア・アンド・スペース・パワー研究（第9号）

において一目置かれるような存在であることが望ましい。説得力を持つアセスメントを提示するためには、知的基盤の裏付けは有益であり、デジタルできないアセスメントを提示する際には、その表現力等も必要なツールになり得る。

ただし、アセスメントには実務上の観点は当然必要であるし、先に指摘したように軍事史的観点も必要になる。様々な学術における分析枠組の専門家も含め、アセスメントを実施するグループにこういった多岐にわたる分野の専門家等を巧みに取り入れていくことが重要であり、同時に困難を伴う点でもあろう。米国の著名な研究者等であっても実施が困難なネットアセスメントである。明確な問いに基づいて徹底的に考え抜くことを目指し、まずは取り組んでみるというのも一案であらう。

（本稿は筆者が航空研究センターに勤務していた際の研究成果である。）

---

<sup>1</sup> 例えば、James G. Roche and Thomas G. Mahnken, “What is Net Assessment?” Thomas G. Mahnken, eds., *Net Assessment and Military Strategy: Retrospective and Prospective Essays*, Cambria Press, 2020, p. 13 ; Yee-Kuang Heng, “The Return of Net Assessment,” p. 136.

<sup>2</sup> このあたりの経緯は、次に詳しい。Barry D. Watts, “Net Assessment in the Era of Superpower Competition,” Thomas G. Mahnken, eds., *Net Assessment and Military Strategy: Retrospective and Prospective Essays*, Cambria Press, 2020.

<sup>3</sup> 例えば、Peter Roberts and Sidharth Kaushal, “Strategic Net Assessment: Opportunities and Pitfalls,” *The RUSI Journal*, 163:6, December 2018, pp.66-67 ; Yee-Kuang Heng, “The Return of Net Assessment,” *Survival*, Vol.49 No.4, 2007-08, pp.136-137.

<sup>4</sup> 谷口智彦は、*Net Assessment* の邦訳について、“net”は、「正味の」や「差し引き相殺」を意味することから、「差し引き相殺評価」か「正味の評価を自分に下すこと」とするほかないとしている。谷口智彦「解説：米国という戦後秩序の主体が、内奥において何を自問し、解こうとしたか」アンドリュー・クレピネヴィッチ、バリー・ワッツ『帝国の参謀』北川知子訳、日経BP社、2016年、455-456頁。

<sup>5</sup> このようなネットアセスメントに精通し、国防問題に関わる自身の研究にこの分析的原則を適用しようとする研究者が「セイント・アンドリュース・スクール」の一員と呼ばれることがある。クレピネヴィッチ、ワッツ『帝国の参謀』、306-307頁。2021年3月現在、コーエンはジョンズ・ホプキンス大学高等国際関係大学院（SAIS）の学長、ブラッケンはイェール大学経営大学院教授、ローゼンはハーバード大学教授としてそれぞれ教鞭をとっており、マンケン（Mahnken）はCSBA所長を務めつつ、SAISでも教鞭をとっている。

<sup>6</sup> アンドリュー・クレピネヴィッチ、バリー・ワッツ『帝国の参謀』北川知子訳、日経BP社、2016年、169頁。

<sup>7</sup> クレピネヴィッチ、ワッツ『帝国の参謀』、171頁。

<sup>8</sup> 例えば、ハーバート・ゴールドハマー（Herbert Goldhamer）、チャールズ・ヒッチ（Charles Hitch）、ハーマン・カーン（Herman Kahn）、アルバート・ウォルステッター（Albert Wohlstetter）、ジェームズ・ディグビー（James Digby）、そしてジョセフ・ロフトス（Joseph E. Loftus）等

- <sup>9</sup> Andrew W. Marshall, “The Origin of Net Assessment,” Thomas G. Mahnken, eds., *Net Assessment and Military Strategy: Retrospective and Prospective Essays*, Cambria Press, 2020, p. 6.
- <sup>10</sup> クレピネヴィッチ、ワッツ『帝国の参謀』、202頁。
- <sup>11</sup> マーシャルはこうした姿勢を徹底し、一般にはもちろんのこと、ONAのスタッフに対してもネットアセスメントの手法等を教授することはなかったとされる。クレピネヴィッチ、ワッツ『帝国の参謀』、202、428-429頁。その一方で、マーシャルはメンターとしてスタッフを適切な方向に導くことにも努めていた。クレピネヴィッチ、ワッツ『帝国の参謀』、429頁；Mie Augier, “Thinking about War and Peace: Andrew Marshall and the Early Development of the Intellectual Foundations of Net Assessment,” *Comparative Strategy*, 32:1, February 2013, p. 2.
- <sup>12</sup> クレピネヴィッチ、ワッツ『帝国の参謀』、169-170頁。
- <sup>13</sup> 同上、190頁。
- <sup>14</sup> 同上、215頁。
- <sup>15</sup> 同上、191頁。
- <sup>16</sup> 同上、169頁。
- <sup>17</sup> Eliot Cohen, “Net Assessment: An American Approach,” *JCSS Memorandum*, No. 29, April 1990, p. 4.
- <sup>18</sup> Paul Bracken, “Net Assessment: A Practical Guide,” *Parameters*, 36, Spring 2006, p. 91.
- <sup>19</sup> Stephen Peter Rosen, “Net Assessment as an analytical Concept,” Andrew W. Marshall, J.J. Martin, and Henry Rosen, eds., *On Not Confusing Ourselves*, Westview Press, 1991, p. 290.
- <sup>20</sup> James G. Roche and Thomas G. Mahnken, “What is Net Assessment?” pp.14-15.
- <sup>21</sup> Thomas M. Skypek and Bradley A. Thayer, “US Strategic thought and the passing of Andrew W. Marshall,” *The Hill*, April 5, 2019, <https://thehill.com/opinion/national-security/437591-us-strategic-thought-and-the-passing-of-andrew-w-marshall>
- <sup>22</sup> Andrew F. Krepinevich, Jr., “Measures of Power: On the Lasting Value of Net Assessment,” *Foreign Affairs*, April 19, 2019.
- <sup>23</sup> Bracken, “Net Assessment: A Practical Guide,” p. 91.
- <sup>24</sup> 状況評価の要領等については、コーエンの説明を参照。Cohen, “Net Assessment: An American Approach,” pp.7-8.
- <sup>25</sup> 加えて、ネットアセスメントはすぐに対応する必要のあることを強調するのではなく、国家安全保障上の注目点に関心を向かせる。Marshall, “The Origin of Net Assessment,” p. 5.
- <sup>26</sup> Cohen, “Net Assessment: An American Approach,” pp. 9-12.
- <sup>27</sup> 戦略的非対称性（strategic asymmetries）とは、相手を自己と同一視しないということであり、例えば、同じ技術を有していたとしても、相手は自らとは異なる使用方法を見出しているかも知れないという点を考慮すべきということである。Bracken, “Net Assessment: A Practical Guide,” p. 97.
- <sup>28</sup> *Ibid.*, pp. 92-98.
- <sup>29</sup> *Ibid.*, p. 98.
- <sup>30</sup> Roche and Mahnken, “What is Net Assessment?” pp. 16-22.
- <sup>31</sup> Thomas M. Skypek, “Evaluating Military Balances through the Lens of Net Assessment: History and Application,” *Journal of Military and Strategic Studies*, 12, Winter 2010, p. 3.
- <sup>32</sup> *Ibid.*, p. 9.
- <sup>33</sup> SWOT分析との類似点については、ロバーツとコーシャル（Peter Roberts and Sidharth Kaushal）も指摘しているが、ロバーツとコーシャルは、ネットアセスメントにおける強み弱みが相対的な関係で決まる点が相違点としている。Peter Roberts and Sidharth Kaushal, “Strategic Net Assessment: Opportunities and Pitfalls,” *The*

*RUSI Journal*, 163:6, December 2018, p. 70.

<sup>34</sup> Gabriel Elefteriu, “A Question of Power: Towards Better UK Strategy Through Net Assessment,” *Policy Exchange*, November 2018, p.24. コーエンは、付随的なバランスの評価は、この2点にはとどまらないだろうとの見解も示している。Cohen, “Net Assessment: An American Approach,” p. 13.

<sup>35</sup> クレビネヴィッチ、ワッツ『帝国の参謀』、191頁。

<sup>36</sup> Bracken, “Net Assessment: A Practical Guide,” p. 94.

<sup>37</sup> Cohen, “Net Assessment: An American Approach,” p. 13.

<sup>38</sup> *Ibid.*, pp. 13-14.

<sup>39</sup> Bracken, “Net Assessment: A Practical Guide,” p. 99.

<sup>40</sup> Roche and Mahnken, “What is Net Assessment?” pp. 22-23.

<sup>41</sup> 20年以上の過去にさかのぼり、5~10年先を見通そうとするネットアセスメントの時間軸は、ネットアセスメントに携わってきた研究者等に共通しているように見受けられる。

<sup>42</sup> Roche and Mahnken, “What is Net Assessment?” p. 20.

<sup>43</sup> Cohen, “Net Assessment: An American Approach,” pp. 15-16.

<sup>44</sup> *Ibid.*, pp. 15-16.

<sup>45</sup> *Ibid.*, p. 17.

<sup>46</sup> *Ibid.*, pp. 18-19.

<sup>47</sup> ネットアセスメントの特徴やテンプレート等の説明において多くの研究者等が言及している「asymmetry」について、スキュペクは「ネットアセスメントの文脈では、多くの場合「比較優位」を意味する」と説明している。Skypek, “Evaluating Military Balances through the Lens of Net Assessment: History and Application,” p. 3.

<sup>48</sup> *Ibid.*, pp. 7-8.

<sup>49</sup> *Ibid.*, p. 6.

<sup>50</sup> *Ibid.*, p. 9.

<sup>51</sup> *Ibid.*, p. 6.

<sup>52</sup> Watts, “Net Assessment in the Era of Superpower Competition,” p. 51.

<sup>53</sup> *Ibid.*, pp. 51-52.

<sup>54</sup> Williamson Murray, “Contributions of Military Historians,” Thomas G. Mahnken, eds., *Net Assessment and Military Strategy: Retrospective and Prospective Essays*, Cambria Press, 2020, p. 141.

<sup>55</sup> *Ibid.*, p. 140.

<sup>56</sup> マーレイは、冷戦期のドイツが旧敵国からの支援を得るために、ドイツ国防軍は第2次世界大戦中の戦争犯罪には加担していなかったとのナラティブを作り上げたことを例として挙げている。

<sup>57</sup> Murray, “Contributions of Military Historians,” p. 142.

<sup>58</sup> *Ibid.*, p. 141.

<sup>59</sup> John A. Battilega, “Assessing Soviet Military Capabilities,” Thomas G. Mahnken, eds., *Net Assessment and Military Strategy: Retrospective and Prospective Essays*, Cambria Press, 2020, p. 131.

<sup>60</sup> クレビネヴィッチ、ワッツ『帝国の参謀』、207-208頁。

<sup>61</sup> 同上、211頁。

<sup>62</sup> Battilega, “Assessing Soviet Military Capabilities,” p. 120.

<sup>63</sup> 当初、ONAは、NSCに置かれていた。

<sup>64</sup> Thomas G. Mahnken, “Net Assessment and its Customers,” Thomas G. Mahnken, eds., *Net Assessment and Military Strategy: Retrospective and Prospective Essays*, Cambria Press, 2020, p. 100.

<sup>65</sup> ただし、ワインバーガーについては、国防長官就任後はONAへの関心をほとんど有していないようだったとも述べられている。*Ibid.*, pp. 106-107.

<sup>66</sup> チェイニーは冷戦の終結期に際し、ONAの形式的なレポートよりも、ONAが持つ

知的ネットワークに価値を見出していたとされている。Ibid., p. 109.

<sup>67</sup> *Ibid.*, p. 103.

<sup>68</sup> 次を参照。Department of Defense, *DoD Directive 5111.11*, April 14, 2020.

<sup>69</sup> クレビネヴィッチ、ワッツ『帝国の参謀』、215頁。

<sup>70</sup> コーエンも、「優れたネットアセスメントは、組織的な成果による」と述べている。

Cohen, “Net Assessment: An American Approach,” pp. 21.

<sup>71</sup> クレビネヴィッチ、ワッツ『帝国の参謀』、427頁。

<sup>72</sup> Cohen, “Net Assessment: An American Approach,” p. 21.

<sup>73</sup> ONA が作成した報告書の数について、例えば 1977～81 年（ブラウン国防長官）が 11 本、1982～91 年（ワインバーガー国防長官、カールッチ国防長官、チェイニー国防長官）が 8 本、1992～2001 年（アスピン国防長官、ペリー国防長官、コーエン国防長官）が 4 本とされている。クレビネヴィッチ、ワッツ『帝国の参謀』、234 頁。

<sup>74</sup> クレビネヴィッチ、ワッツ『帝国の参謀』、429-431 頁。

<sup>75</sup> Marshall, “The Origins of Net Assessment,” p. 2-3.

<sup>76</sup> Cohen, “Net Assessment: An American Approach,” p. 22.

<sup>77</sup> クレビネヴィッチ、ワッツ『帝国の参謀』、308-309、384-385 頁。

<sup>78</sup> 同上、383-384 頁。

<sup>79</sup> Skypek, “Evaluating Military Balances through the Lens of Net Assessment: History and Application,” p. 9.

<sup>80</sup> Cohen, “Net Assessment: An American Approach,” p. 20.

<sup>81</sup> Adam N. Shulsky, “Understanding the Nature of “the other”,” Thomas G. Mahnken, eds., *Net Assessment and Military Strategy: Retrospective and Prospective Essays*, Cambria Press, 2020, p. 184.

<sup>82</sup> *Ibid.*